魯迅とバイロンの宗教的詩劇『カイン』

陳　　維

Lu Xun and Byron's religious drama *Cain*

CHEN wei

During Lu Xun's early years studying in Japan, He wrote an article *On the Power of Romantic Poetry* (「魔羅詩力説」) to introduce western literary. In this paper, Lu Xun focused on Byron, one of Romantic Poets. In these introductory commentaries, one of those commentaries is about Byron's religious drama *Cain*. Masako Kitaoka (北岡正子), an expert studying Lu Xun, discovered there were original materials for those commentaries, which means Lu Xun consulted these materials when he wrote these introductions and comments for *Cain*. Based on the researches of Masako Kitaoka, this paper mainly talk about two issues: one is whether Lu Xun did read *Cain* (no matter which language version) or not; the other is how Lu Xun selected Kimura Takatarō (木村鷹太郎)'s materials, and Lu Xun's attitudes towards *Cain*.

キーワード：「魔羅詩力説」、北岡正子、木村鷹太郎、バイロン、『カイン』

はじめに

1907年、日本留学中の魯迅は、西洋文芸を紹介する論文「摩羅詩力説」を発表したが、この論文は1908年２、３月、雑誌『河南』月刊第二、三号に掲載された。論文では、魯迅は主に西洋において「摩羅詩派」と呼ばれている作家らを紹介した。全論文は九節に分けられ、第一節から第三節までは総論であり、第四節から第九節前半までは各論であり、第九節後半は結論である。

中国における魯迅研究史では、この論文は魯迅の初期の紹介的な文章であり、魯迅が正式的に文学の道を歩む前の試作品であると考えられている。また、魯迅がこの文章を創作する際に参考した書籍などを探索せず、一体、どの部分が他の資料を参考としたのか、どの部分が魯迅の見解から出されたものなのかを区別できず、この論文に対する研究は放置して顧みられていないという現状となっていると言ってもよかろう。

この状況は1983年になると、日本における魯迅研究者北岡正子氏の著書《摩羅詩力説材源考》中国語版が世に出ることで、打破されるに至った。この著書では、北岡氏は以下のように、指摘している。

「週作人の回想録では、分論の一部分（第七、八節）は出典があると既に指摘されている。しかし、近年では、この部分だけでなく、ほとんど分論の全ての部分は出典であると明らかにした。」[1)]

本論文は魯迅が評論したバイロンの『旧約聖書』を題材にした詩劇『カイン』（「魔羅詩力説」の第四節）を再検討しているので、北岡氏が提供したバイロンに関する部分の最初の資料に注目した。それらは以下のとおりである。

①木村鷹太郎『バイロン　文芸界之大魔王』（日本語）、三百七十三頁、日本大学館、一九〇二年。
②『海賊』（日本語）、木村鷹太郎　訳、二百八十五頁、日本尚友館、一九〇五年。[2)]

このように、上述した二点の最初の資料を、魯迅が論述したバイロンの部分と比較してみると、一体、魯迅がどのように最初の資料を取捨選択したのか、また、魯迅の『カイン』に対する独創的な見解が窺われると考えられる。しかし、北岡氏《摩羅詩力説材源考》中国語版では、魯迅が評論したバイロン『カイン』の部分は、ただ最初の資料の出所を列挙しただけで、コメントが少ない。したがって、本論文は北岡氏の研究にもとづき、魯迅が論述した『カイン』についての部分を再分析してみたい。

北岡氏の著書が出版されて以来、中国国内の学者は直ちに魯迅研究史ではこの画期的な研究に注目し始めた。高旭東氏の〈拜倫的《該隱》與魯迅的《狂人日記》〉中では、以下のように述べられている。

「一見して、「摩羅詩力説」中では、『カイン』を紹介する文字が2行しかないが、実は魯迅は『カイン』と『天と地』を一緒に紹介したわけである。紹介した後、長い議論が出されている。「顧善者乃不喜華果，特嗜腥膻，凱因之獻，純潔無似，則以旋風振而落之。」[3)] という一句における「則以旋風振而落之。」は、木村氏の原文によるものではなく、魯迅が『カイン』の第三幕の場面を概括したものである。また、許寿裳の回憶によると、「魯迅が弘文学院に在籍するときに、既に多く日本語の書籍を購入し、机の引き出しに隠している。例えばバイロンの詩、ニーチェの伝記など……」。以上の確実な証拠からみると、魯迅が「摩羅詩力説」を創作する前に、『カイン』を読んだと私は考える。」[4)]（下線筆者）

また、高旭東氏の〈論《該隱》對魯迅思想的影響〉中では、「魯迅は、『カイン』から、敢えて疑い、

1）北岡正子《魔羅詩力説材源考》、何乃英　訳、北京師範大学出版社、1983年、1頁。引用文は筆者が翻訳したものである。
2）北岡正子《魔羅詩力説材源考》、何乃英　訳、北京師範大学出版社、1983年、1頁。引用文は筆者が翻訳したものである。
3）日本語訳は「その善なる神は美しき果実を喜ばず葷腥のみをうけ、カインの供物はこのうえもなく清純であったため、旋風を起こして吹き払ってしまった。」とある。ここの日本語訳は北岡正子氏が翻訳したものである（『魯迅全集・第一巻・墳・魔羅詩力説』、学習研究社、1984年、116頁）。
4）高旭東〈拜倫的《該隱》與魯迅的《狂人日記》〉、《蘇州大学学報（哲学社会科学版）》、1985年第2期、71頁。

反抗するサタンの精神を受け入れ、無辺の伝統の海では、疑い、反抗している。したがって、『カイン』に表れている悲哀はある程度で、彼に影響を与えた。『カイン』は魯迅の思想への影響が大きいだろうと考えられる。」[5] と述べられている。

本論文では、上述した研究成果を結びつけ、魯迅の『カイン』に対する評価を再考察する。そこで、以下の二つの問題を巡り、考察したい。

①魯迅は、一体、『カイン』本文（いかなる言語のバージョンでも）を読んだことがあるのかについて。
②魯迅の『カイン』に対する評価は、上述した参考書と、どのような違いがあるのかについて。

これらを比較することで、魯迅の独自性を検討してみたい。

一

早期の魯迅がバイロンを論述する部分は「摩羅詩力説」に集中している。「摩羅詩力説」の材源考に関する論文は、次のように判明している。

①北岡正子　「摩羅詩力説」材源考ノート[6]（雑誌『野草』）
②北岡正子　《魔羅詩力説材源考》[7]
③北岡正子　『魯迅 救国の夢のゆくえ――悪魔派詩人論から「狂人日記」まで』[8]

なお、バイロンに関する第四、五節はすべて材源があると北岡氏は論証した。それらは木村鷹太郎『バイロン　文芸界之大魔王』[9]、木村鷹太郎が翻訳した『海賊』[10]、米田実『バイロン』[11]、ブランデス『十九世紀文学主潮史』[12]（どの言語のバージョンか判断できない）である。

5）高旭東〈論《該隱》對魯迅思想的影響〉、《信陽師範学院学報（哲学社会科学版）》、1985年第4期、18頁。
6）北岡正子「「摩羅詩力説」材源考ノート」は、二十四回に分かれ、雑誌『野草』の第9、10、11、13、14-15、16、17、18、19、20、23、24、25、26、27、28、29、30、33、47、48、50、52、56に掲載されている。
7）北岡正子《魔羅詩力説材源考》、何乃英　訳、北京師範大学出版社、1983年。
8）北岡正子『魯迅 救国の夢のゆくえ――悪魔派詩人論から「狂人日記」まで』、関西大学出版社、2006年。
9）木村鷹太郎『バイロン　文芸界之大魔王』、大学館、1902年。判明は《魔羅詩力説材源考》（1頁）によるものである。
10）バイロン『海賊』、木村鷹太郎　訳、尚友館、1905年。判明は《魔羅詩力説材源考》（1頁）によるものである。
11）米田実『バイロン』、民友社、1900年。判明は「「摩羅詩力説」材源考ノート〔其の二〕」（45頁）によるものである。
12）判明は「「摩羅詩力説」材源考ノート〔其の二〕」（45頁）によるものである。英語版は1906年に、出版されたので、魯迅が持っているのは英語版の可能性が高いだろうと思う。Georg Brandes, Hovedstromninger i det 19de Aarhundredes Litteratur, vols.1-6, Copenhagen: Gyldendal 1987-90. English translation: Main Currents in 19th Century literature, vols.1-6, trans. By Diana White and Mary Morison, New York: Macmillan 1096. 本論では、使用するバージョンは、春秋社が1932年に出版したブランデス『十九世紀文学主潮史』である。

(1) 二曰《凱因》(Cain)，典據已見於前分，中有魔曰盧希飛勒，導凱因登太空，為論善惡生死之故，凱因悟，遂師摩羅。[15]
(その二つは、『カイン』(Cain) である。典拠はすでに前節に述べた。詩中ルシファーという悪魔がカインを案内して天空にのぼり、そこで善悪、生死の道理について論ずる。これによってカインは悟り、魔羅を師とするようになるのである。[16])

上述した (1) は、魯迅が『カイン』全詩を概括するものである。「典拠はすでに前節に述べた」というのは、「摩羅詩力説」における第三節では、魯迅はカインについて、こう描写している。

「アダムとエヴァはエデンを去って後二子をもうけた。兄をアベルといい弟をカインという。アベルは羊を飼い、カインは耕作に従事し、二人は収穫物を神に献じた。神は葷腥を好んで果実を嫌い、カインの献上物は退けて顧みなかった。かくて、カインは次第にアベルと争うようになり、ついに兄を殺害した。すると神はカインを呪い、その地を不毛と化し、異郷に流亡するを余儀なくさせたのである。」[17]

以上の話は、確かに『旧約聖書・創世記・第四章』によるもので、本文は以下のようである。

「４：１さて、アダムは妻エバを知った。彼女は身ごもってカインを産み、「わたしは主によって男子を得た」と言った。４：２彼女はまたその弟アベルを産んだ。アベルは羊を飼う者となり、カインは土を耕す者となった。４：３時を経て、カインは土の実りを主のもとに献げ物として持って来た。４：４アベルは羊の群れの中から肥えた初子を持って来た。主はアベルとその献げ物に目を留められたが、４：５カインとその献げ物には目を留められなかった。……４：８カインが弟アベルに言葉をかけ、二人が野原に着いたとき、カインは弟アベルを襲って殺した。……４：10主は言われた。「何ということをしたのか。お前の弟の血が土の中からわたしに向かって叫んでいる。４：11今、お前は呪われる者となった。お前が流した弟の血を、口を開けて飲み込んだ土よりもなお、呪われる。４：12土を耕しても、土はもはやお前のために作物を産み出すことはない。お前は地上をさまよい、さすらう者となる。」[18]

『旧約聖書』の内容は魯迅が要約したことと同じである。それ故、魯迅が『カイン』を評論する前に、『旧約聖書』におけるカインに関する典故を読んだと言ってもよかろう。

---

15) 魯迅《魯迅全集・第一巻・墳・魔羅詩力説》、人民文学出版社、2005年、79頁。
16) 魯迅『魯迅全集・第一巻・墳・魔羅詩力説』、学習研究社、1984年、115頁。
17) 魯迅『魯迅全集・第一巻・墳・魔羅詩力説』、学習研究社、1984年、109-110頁、中国語の原文は「亞當夏娃既去樂園，乃舉二子，長曰亞伯，次曰凱因。亞伯牧羊，凱因耕植是事，嘗出所有以獻神。神喜脂膏而惡果實，斥凱因獻不視；以是，凱因漸與亞伯爭，終殺之。神則詛凱因，使不獲地力，流于殊方」とある。
18) 『旧約聖書・創世記・第４章１-12節』、日本聖書協会、1987—1988年、５-６頁。

魯迅は、また、バイロンが『カイン』を創作する目的や、それによる社会反響をも考察したと考えられる。魯迅は、「魔羅詩力説」における第三節では、こう書いている。

> バイロンはこれを題材として劇詩をつくり、大いに神を難詰した。キリスト教徒はみな怒って、神聖を冒瀆し良俗を害し霊魂必滅を喧伝する詩であると言い、徹底的に攻撃を加えた。今日に至るもなお、かくバイロンを攻撃する批評家がある。」[19]

魯迅のこの評論は、歴史上に『カイン』が与えられた事実上の評価と合致しているといえよう（『カイン』は、正統教義に対して露骨に非難を浴びせたため、発表当時、称賛よりも批判が多かった問題作でもある）。その為、魯迅のバイロン『カイン』に対する評価は、正しくて、客観的で精確であろうと考えられる。

「詩中ルシファーという悪魔がカインを案内して天空にのぼり、そこで善悪、生死の道理について論ずる。これによってカインは悟り、魔羅を師とするようになるのである」という話は、魯迅が『カイン』の第二幕を要約した内容である。[20] しかし、北岡正子氏が提供してくれた材源を分析してみると、この一句は、魯迅が参考書を概括したものではないと判明した。

米田実『バイロン』では、『カイン』に関する部分は、172-173頁であり、『カイン』における人物（アダム、エバ、カイン、アベル、悪魔ルシファーなど）に言及したにもかかわらず、「悪魔がカインを案内して天空にのぼ」るという具体的な物語に少しも触れていない。[21]

木村鷹太郎『バイロン　文芸界之大魔王』では、『カイン』に関するところは、第10章――人道と耶蘇教の衝突にあり、161-191頁である。この章では、確かに『カイン』全詩が三幕に分かれているということに言及し、さらに各幕の内容をも詳しく紹介しているものの、第二幕では、ただカインとルシファーの会話と作者の評論しかない。会話のシーン（場所）に全く触れていない。[22] 全10章でも、「悪魔がカインを案内して天空にのぼ」るというシーンに触れていないということがわかった。

また、ブランデス『十九世紀文学主潮史』では、『カイン』に関するところは、第二十章にあり、327-345頁である。文中では、『カイン』における人物（カイン、悪魔ルシファーなど）に触れ、第三幕における、カインとアベルが神に献げ物を捧げ、神がアベルの献げ物に目を留めたが、カインの献げ物には目を留めなかったというシーンまでにも言及した。[23] それにもかかわらず、『カイン』の第二幕のシーン（場

19）魯迅『魯迅全集・第一巻・墳・魔羅詩力説』、学習研究社、1984年、110頁、中国語の原文は「裴倫取其事作傳奇，於神多所詰難。教徒皆怒，謂為瀆聖害俗，張惶靈魂有盡之詩，攻之至力。迄今日評騭之士，亦尚有以是難裴倫者」とある。

20）本論では、使用しているバージョンは、島田謹二が訳した『カイン』（岩波書店、2009年第4刷、1960年初版）である。62-117頁の第二幕を参照。

21）米田実『バイロン』、民友社、1900年、172-173頁。

22）木村鷹太郎『バイロン　文芸界之大魔王』、大学館、1902年、161-191頁。

23）ブランデス『十九世紀文学主潮史』、春秋社、1932年、343頁。

所、天空）に全章では、触れていないということがわかった。[24] もし魯迅は上述した材料しか参考にしなかったとすれば、『カイン』の第二幕のシーン（場所、天空）はどうやっても知ることができなかったと言ってもよかろう。

つまり、魯迅が『カイン』（何の言語のバージョンでも）を読んだ可能性があると推測できる。北岡正子氏《魔羅詩力説材源考》中では、当時、魯迅がどんな翻訳作品を読んでいるのかということについて、こう述べられている。

「翻訳作品については、1904年から1907年までは、バイロン『パリジナ』、『カイン』、『マゼッパ』……などがあった。」[25]

具体的に、何のバージョンを読んだかということが言及されていないが、これらの裏付けとして、魯迅が『カイン』を読んだ可能性が高いと推測できる。

(2) 比行世，大遭教徒攻撃，則作《天地》(Heaven and Earth) 以報之，英雄為耶彼第，博愛而厭世，亦以詰難教宗，鳴其非理者。[26]
（これが公刊されると、キリスト教徒の大攻撃を受けた。そこで、『天と地』(Heaven and Earth) を書き応酬した。主人公の名はヤペテその博愛と厭世を描いてキリスト教を難詰し、その理の非なることを唱えたものである。[27]）

上述した（2）の材源は、確かに木村鷹太郎『バイロン　文芸界之大魔王』第二編六章、102頁によるものである[28] と確認した。

原文は、

「同年十月『天地』篇成る、これ亦耶蘇教の攻撃にして、ヤペテの博愛的厭世を寫したる、悲壯にして高尚なる大文子なり」とある。

及び三篇十章、162頁によるものである。

原文は、

24）『十九世紀文学主潮史』の342頁には、「ルシファアに助けられて、カインの行動は、一部分超自然界に移る。というのはこの精霊が深淵の如き空間を通って弟子を運び行き、彼に人の住む世界の凡てを、死の国々を示し、更に未来の濛気を通して未だ産れざる時代を示すからである。」と書かれているが、カインがルシファーに案内され、天空にのぼるというシーンと等しいと思わない。

25）北岡正子《魔羅詩力説材源考・第一章》、何乃英　訳、北京師範大学出版社、1983年、１頁。

26）魯迅《魯迅全集・第一巻・墳・魔羅詩力説》、人民文学出版社、2005年、79頁。

27）魯迅『魯迅全集・第一巻・墳・魔羅詩力説』、学習研究社、北岡正子　訳、1984年、115頁。

28）北岡正子《魔羅詩力説材源考》、何乃英　訳、北京師範大学出版社、1983年、20頁。

「バイロン又『天地』篇の詩あり（Heaven and Earth)。これ宗教家の不人情を鳴らす慷慨の詩なり。耶蘇教の論評多く是等の内に存す。其攻撃する所は大抵舊約書の信仰にありと雖、亦耶蘇教徒の徳義上の反省を促がすに足るもの少なからざるなり」とある。

上述した内容を比較してみると、(2) は、魯迅がバイロンのもう一つの神秘劇『天と地』を評論していることがわかった。しかし、上述した要約された内容は、木村鷹太郎『バイロン文芸界之大魔王』における評論を超えることはないと言ってもよかろう。

(3) 夫撒但何由昉乎？以彼教言，則亦天使之大者，徒以陡起大望，生背神心，敗而墮獄，是雲魔鬼。由是言之，則魔亦神所手創者矣。[29]
(そもそもサタンの起源はなんであろうか。キリスト教のいうところによれば、サタンは天使中の大天使であった。ところがふと大望を抱き、神に叛かんとしたため、戦い敗れて地獄に堕ちた、そこで悪魔と呼んだのである。これによれば、悪魔もまた神が手ずから創ったものである。[30])

上述した (3) の材源は、確かに木村鷹太郎『バイロン　文芸界之大魔王』第三篇十章、173頁によるものである[31] と確認した。
原文は、

「茲に又他の難問生ず、即ち悪魔の起原これなり。耶蘇教の云ふ所に由れば、悪魔は本來悪なるに非ずして、初め天上に在りし時は、大天使として神の榮光の御坐に親近せり、然るに一旦大望を起し、神に對して反亂を企て、戰敗れて遂に天上より墮落したるものなりとなす。されども悪魔も亦神の創造する所なり、」とある。

上述した内容を比較してみると、(3) はすべて、材源によるものであり、原文の評論を超えることがないと言ってもよかろう。

(4) 已而潛入樂園，至善美安樂之伊甸，以一言而立毀，非具大能力，曷克至是？伊甸，神所保也，而魔毀之，神安得雲全能？況自創悪物，又從而懲之，且更瓜蔓以懲人，其慈又安在？故凱因曰，神為不幸之因。神亦自不幸，手造破滅之不幸者，何幸福之可言？而吾父曰，神全能也。問之曰，神善，何複悪邪？則曰，悪者，就善之道爾。[32]
(やがて楽園に入り、至善、至美、至楽のエデンを、一言のもとに壊した。大能力を備えていなけれ

29) 魯迅《魯迅全集・第一巻・墳・魔羅詩力説》、人民文学出版社、2005年、79頁。
30) 魯迅『魯迅全集・第一巻・墳・魔羅詩力説』、学習研究社、北岡正子　訳、1984年、115頁。
31) 北岡正子《魔羅詩力説材源考》、何乃英　訳、北京師範大学出版社、1983年、20頁。
32) 魯迅《魯迅全集・第一巻・墳・魔羅詩力説》、人民文学出版社、2005年、79-80頁。

ば、このように神にうち克つことはできぬであろう。エデンは神の司る所である。それを悪魔が破壊したのであれば、神は全能といい得ぬのではあるまいか。まして、自ら悪しきものを創りながら、悪故にそれを罰し、かつ累を及ばして人をも罰しようとするのなら、慈悲なぞどこにあろうか。故にカインは言う、「神は不幸の源である。神自身もまた不幸である。手ずから破滅の不幸を造り出す者が、どうして幸福であると言えるだろうか。しかるに父は『神は全能である』と言う、そこで『神が善であるならば、何故悪をなすのか』と問うと、『悪とは善にゆく道なのだ』と答えた」と。[33])

上述した（4）の材源は、木村鷹太郎『バイロン　文芸界之大魔王』第三篇十章、174頁によるものである[34]ことを確認した。

原文は、

「意ふに神は必ず至善、至美、至樂なる天地を造らんとせしや明なり、然るに其目的は悪魔の爲めに攪亂せられたりとせば、悪魔も亦大能力を有し、神は全能に非ざることを示めすなり。是を以てカインは此世界に存在せる苦痛と云へる事實を捕へ來り、以て神の全能仁慈ならざるを論じ、ルシファーに語て曰く

『何を以て我は存在するや何故に汝、不幸なるや、又萬物盡く不幸なるは何故ぞ。神は不幸の源因として、神自身も亦不幸なりと謂はざるを得ず。此く破滅の不幸を造るもの又決して幸福なる者には非ざるべし。然るに我父アダムは云ふ神は萬能なりと、然らば善たる神は何故に悪たるや。我之を父に問ふ、父答へて曰く「悪は善に行くの道なり」と』」とある。

上述した内容を比較してみると、魯迅は、ただ幾つかの単語を入れ替え、叙述する順番さえをも変えず、原文の評論を超えることがないと考えられる。

（5）神之為善，誠如其言：先以凍餒，乃與之衣食；先以癘疫，乃施之救援；手造罪人，而曰吾赦汝矣。人則曰，神可頌哉，神可頌哉！[35]
（神の行う善は、まことにここに言うとおりである。先ず飢寒にさらし、その後で衣食を与える。先ず悪疫を見舞い、その後で救助の手をさしのべる。手ずから罪人を造り、その後でわれ汝を赦すなりと言う。すると、神は頌うべきかな、頌うべきかな、と人は言」[36]う。）

上述した（5）の材源は、木村鷹太郎『バイロン　文芸界之大魔王』第三篇十章、175頁によるもので

33）魯迅『魯迅全集・第一巻・墳・魔羅詩力説』、学習研究社、北岡正子　訳、1984年、115頁。
34）北岡正子《魔羅詩力説材源考》、何乃英　訳、北京師範大学出版社、1983年、21頁。
35）魯迅《魯迅全集・第一巻・墳・魔羅詩力説》、人民文学出版社、2005年、80頁。
36）魯迅『魯迅全集・第一巻・墳・魔羅詩力説』、学習研究社、北岡正子　訳、1984年、115-116頁。

ある[37] ことを確認した。

原文は、

「耶蘇教徒の悪を説明すること大抵此くの如し。人を苦しめて後其苦しみを救ひ、人を飢渇せしめて之に食を與へ、而して以て善と稱す。或は天災地變悪疫等（これ神の事業か）に由て人類の害を被ること少しとせず、然るに耶蘇教徒は神意なりとして之を救助すと稱し、而して「神は讃むべきかな」と云ふ」とある。

上述した内容を比較してみると、(5) は、すべて材源によるものであり、原文の評論を超えることがないとわかった。

(6) 營營而建伽藍焉。[38]

(営々として伽藍を建立するのである。[39])

(6) は、魯迅が加えたものなので、参考資料によるものではないと判明した。伽藍とは、サンスクリット語の音訳であり、仏教の寺院を指す。ここでは、キリスト教の教会などの建物を指している。ここでは、魯迅は、キリスト教徒が信仰する神の偽りを批判している。神は、ペテンを使い、人々（キリスト教徒）を騙しているが、大衆は依然として、神の善と全能を褒め称え、ところどころに教会などを造っている。

(7) 盧希飛勒不然，曰吾誓之兩間，吾實有勝我之強者，而無有加於我之上位。彼勝我故，名我曰悪，若我致勝，悪且在神，善悪易位耳。[40]

(が、ルシファーは違う、「われは天地に誓って言う。われにはたしかに、われに勝れる強者がいる、しかし、我が上に位するものはいないのだ。彼がわれに勝ったが故にわれを悪と名づけた。もしわれが勝利をおさめていれば、神こそが悪である。善悪所を易えるまでのことだ」と言う。[41])

上述した (7) の材源は、確かに木村鷹太郎『バイロン　文芸界之大魔王』第三篇十章、181-182によるものである[42] と確認した。

原文は、

---

37) 北岡正子《魔羅詩力説材源考》、何乃英　訳、北京師範大学出版社、1983年、21-22頁。

38) 魯迅《魯迅全集・第一巻・墳・魔羅詩力説》、人民文学出版社、2005年、80頁。

39) 魯迅『魯迅全集・第一巻・墳・魔羅詩力説』、学習研究社、北岡正子　訳、1984年、116頁。

40) 魯迅《魯迅全集・第一巻・墳・魔羅詩力説》、人民文学出版社、2005年、80頁。

41) 魯迅『魯迅全集・第一巻・墳・魔羅詩力説』、学習研究社、北岡正子　訳、1984年、116頁。

42) 北岡正子《魔羅詩力説材源考》、何乃英　訳、北京師範大学出版社、1983年、22頁。

「ルシファーはエホバの爲めに敗られたり、然りと雖彼決してエホバを戴かんとはせざるなり、即ちカインに答へて曰く、

『否、我天地に誓て否と云はん、我は實に我に勝ちたる強者を有せり、然りと雖奉戴すべき上位者は之を有せず。……彼は勝利者として、敗北者たる我を悪と云ふと雖、我若し彼に勝ちしならんには、彼れの事業は悪となり、善悪所を代ふべきのみ』（カイン二の二）」とある。

上述した内容を比較してみると、(7) は、すべて材源によるものであり、原文の評論を超えることがないとわかった。

(8) 此其論善悪，正異尼佉。尼佉意謂強勝弱故，弱者乃字其所為曰悪，故悪實強之代名；此則以悪為弱之冤諡。故尼佉欲自強，而並頌強者；此則亦欲自強，而力抗強者，好悪至不同，特圖強則一而已。[43]

（この善悪の論はニーチェとまったく逆である。ニーチェは、強者は弱者に勝つが故に、弱者が強者の行為を悪と名付けるのだと考える。悪とは実は強者の代名詞である。だがルシファーは、悪とは弱者が被ったいわれなき呼称であると考える。故にニーチェは自ら強者たらんとし、かつ強者を称えた。ルシファーも自ら強者たらんとしたが、強者には力の限り抵抗した。両者の好悪するところは逆である、ただ強者たらんと図る点のみが一致しているのだ。）[44]

(8) は、参考資料によるものではなく、魯迅が加えたものであると判明した。ここで、魯迅は、ニーチェとルシファーの善と悪に対する理解を比較した。ニーチェの考えでは、強者は弱者に勝つが故に、弱者からみると、強者＝悪者である。ニーチェは明らかに強者側に立ち、かつ強者を称えていると魯迅は考える。一方、ルシファーの考えはニーチェとは正反対である。強者は弱者に勝つが故に、弱者に悪者のレッテルを貼っている。ルシファーは、弱者に立って自らを弁護し、弱者が悪者ではないと思うため、強者に抵抗していると魯迅は考える。

(9) 人謂神強，因亦至善。[45]

（人は、神は強であることによって至善であるのだと言う。）[46]

上述した (9) の材源は、確かに木村鷹太郎『バイロン　文芸界之大魔王』第三篇十章、178-179によるものである[47] と確認した。

原文は、

43) 魯迅《魯迅全集・第一巻・墳・魔羅詩力説》、人民文学出版社、2005年、80頁。
44) 魯迅『魯迅全集・第一巻・墳・魔羅詩力説』、学習研究社、北岡正子　訳、1984年、116頁。
45) 魯迅《魯迅全集・第一巻・墳・魔羅詩力説》、人民文学出版社、2005年、80頁。
46) 魯迅『魯迅全集・第一巻・墳・魔羅詩力説』、学習研究社、北岡正子　訳、1984年、116頁。
47) 北岡正子《魔羅詩力説材源考》、何乃英　訳、北京師範大学出版社、1983年、22頁。

「又善悪の性質を考へ見よ、神の善なりと稱せらるゝは、其強大なる力を有するが故なるを知らん」とある。

上述した内容を比較してみると、(9) は、すべて材源によるものであり、原文の評論を超えることがないとわかった。

(10) 顧善者乃不喜華果，特嗜腥膻，凱因之獻，純潔無似，[48]
(だが、その善なる神は美しき果実を喜ばず葷腥のみをうけ、カインの供物はこのうえもなく清純であったため[49]、)

上述した (10) の材源は、木村鷹太郎『バイロン　文芸界之大魔王』第三篇十章、183-184頁によるものである[50] と確認した。
原文は、

「されども舊約書の神は殘忍にして蔬菜の供物よりも、羊の犧牲を好みたり。……然るに神はカインの供へたる美はしき、花咲く野邊の果實を取らずして、羊の犧牲を饗けたり」とある。

上述した内容を比較してみると、(10) は、すべて材源によるものであり、原文の評論を超えることがないとわかった。

(11) 則以旋風振而落之。[51]
(旋風を起こして吹き払ってしまった。[52])

(11) を考証した結果、北岡正子氏が提供してくれた材源によるものではなく、二つのところによる可能性が高いだろうと私は考える。一つは『カイン』の原文によるものである。第三幕では、次のような話が書かれている。

「アベルの祭壇の上の焔はばっと燃えあがって、輝きわたる焔の柱となり、空高く昇っていく。一方、カインの祭壇をつむじ風が吹き倒し、果実の群を大地の上に撒き散らす。」[53]

---

48) 魯迅《魯迅全集・第一巻・墳・魔羅詩力説》、人民文学出版社、2005年、80頁。
49) 魯迅『魯迅全集・第一巻・墳・魔羅詩力説』、学習研究社、北岡正子　訳、1984年、116頁。
50) 北岡正子《魔羅詩力説材源考》、何乃英　訳、北京師範大学出版社、1983年、23頁。
51) 魯迅《魯迅全集・第一巻・墳・魔羅詩力説》、人民文学出版社、2005年、80頁。
52) 魯迅『魯迅全集・第一巻・墳・魔羅詩力説』、学習研究社、北岡正子　訳、1984年、116頁。
53) バイロン『カイン』、島田謹二　訳、岩波書店、2009年（初版1960年）、140頁。

そうだとすれば、魯迅は原文を読んだに相違ない。もう一つは、ブランデス『十九世紀文学主潮史』第六巻第二十章――バイロン――革命精神によるものであると判明した。原文は以下のように、書かれている。

「火は天から下り、アベルの犠牲を焼き、焔は貪る如く祭壇上の血潮を舐め盡くす。然し一陣の旋風は、カインの祭壇を覆へし、地上に果實を四散せしむ。」[54)]

もしそうだとすれば、魯迅がブランデス『十九世紀文学主潮史』第六巻第二十章を読んだと裏付けられたと言ってもよかろう。ひいては、魯迅は両方とも読んだ可能性も言及できよう。

（12）人類之始，實由主神，一拂其心，即發洪水，並無罪之禽蟲卉木而殄之。[55)]
（人類は実は主なる神により創造されたものだ。が、一旦神の心にそむくや、洪水を起こして罪もない禽虫草木もろともに滅ぼしてしまったのである。[56)]）

上述した（12）の材源は、確かに木村鷹太郎『バイロン　文芸界之大魔王』第三篇十章、184-185頁によるものである[57)] と確認した。
原文は、

「舊約書の記する所に由れば、神の人類を造りたる以來、種族非常に繁殖し、又甚だ罪悪の性質となれり、茲に於て神は洪水を以て之を滅ぼし人類を新にせんとす。……滔々たる洪水を以て罪もなき禽獣虫魚に至るまで盡く之を殲滅せんとし、遁げ叫ぶ老若男女を怒濤の中に溺沒せしむ」とある。

上述した内容を比較してみると、魯迅は上述した材料を要約し、（12）を書いた。原文の評論を超えることがないと考えられる。

（13）人則曰，爰滅罪悪，神可頌哉！[58)]
（それを人は、これで罪悪は滅びた、神は頌うべきかな、と言う。[59)]）

（13）は材源資料によるものではなく、魯迅が自ら評論を出したと考えられる。（13）は（6）に呼応し、主に神を信仰し、畏敬している大衆（キリスト教徒）の愚かさを批判した。魯迅からみると、神が

54）ブランデス『十九世紀文学主潮史』、春秋社、1932年、343頁。
55）魯迅《魯迅全集・第一巻・墳・魔羅詩力説》、人民文学出版社、2005年、80頁。
56）魯迅『魯迅全集・第一巻・墳・魔羅詩力説』、学習研究社、北岡正子　訳、1984年、116頁。
57）北岡正子《魔羅詩力説材源考》、何乃英　訳、北京師範大学出版社、1983年、23頁。
58）魯迅《魯迅全集・第一巻・墳・魔羅詩力説》、人民文学出版社、2005年、80頁。
59）魯迅『魯迅全集・第一巻・墳・魔羅詩力説』、学習研究社、北岡正子　訳、1984年、116頁。

洪水を起こしたことは、完全に神の利己的な行為であり、自分の意に叶うよう、勝手に無辜の大衆を消滅させたわけである。それにもかかわらず、大衆（キリスト教徒）は、神のこの行為が罪悪を消滅するためだと思い、神を称賛している。それ故、魯迅は神の行為と大衆の愚かさを両方とも批判した。

（14）耶彼第乃曰，汝得救孺子眾！汝以為脱身狂濤，獲天幸歟？汝曹偸生，逞其食色，目擊世界之亡，而不生其憫歎；複無勇力，敢當大波，與同胞之人，共其運命；偕厥考逃于方舟，而建都邑於世界之墓上，竟無慚耶？[60]
（そこで、ヤペテは言うのである、「汝、救われたるものの子らよ、汝は逆巻く波より身を逃れ、天佑を得たと思うのか。汝は徒らに生を貪り、食慾色慾を逞しうし、世界の滅亡を目撃しながらこれを憐れむことなく、また敢えて大浪に向かい同胞たる人類と運命をともにする勇気もなく、父とともに方舟に逃れて世界の墓の上に都市を建てようと考える。それで恥ずかしくはないのか」と。[61]）

上述した（14）の材源は、確かに木村鷹太郎『バイロン　文芸界之大魔王』第三篇十章、189-190頁によるものである[62]と確認した。
原文は、

「又滅ぶる人間に同情を有せる精靈の口を借りてノアの一族を詈りて曰く、
『救はれたるもの丶子等よ、汝等獨り逆巻き來る洪水を遁れ、以て幸福なりと思へるか。……汝等苟も生を偸み、飲食男女の慾を逞ふし、世界の大破滅を目擊しつ丶之を憐れむことなく、又勇氣を以て激浪に面し、同胞たる人類と共に其運命を同うすること能はず、父等と共に船に遁れて世界の墓上に都市を建てんとす、汝等之を耻ぢざるか。』」（「天地」）とある。

上述した内容を比較してみると、（14）は魯迅のバイロン『天と地』に対する評論であるが、すべて、材源によるものであり、原文の評論を超えることがないとわかった。

（15）然人竟無慚也，方伏地讚頌，無有休止，以是之故，主神遂強。使眾生去而不之理，更何威力之能有？人既授神以力，複假之以厄撒但；而此種人，又即主神往所殄滅之同類。以撒但之意觀之，其為頑愚陋劣，如何可言？將曉之歟，則音聲未宣，眾已疾走，内容何若，不省察也。將任之歟，則非撒但之心矣，故複以權力現於世。神，一權力也；撒但，亦一權力也。惟撒但之力，即生於神，神力若亡，不為之代；上則以力抗天帝，下則以力制眾生，行之背馳，莫甚於此。顧其制眾生也，即以抗故。倘其眾生同抗，更何制之雲？裴倫亦然，自必居人前，而怒人之後於眾。蓋非自居人前，不能使

60）魯迅《魯迅全集・第一巻・墳・魔羅詩力説》、人民文学出版社、2005年、80頁。
61）魯迅『魯迅全集・第一巻・墳・魔羅詩力説』、学習研究社、北岡正子　訳、1984年、116頁。
62）北岡正子《魔羅詩力説材源考》、何乃英　訳、北京師範大学出版社、1983年、23頁。

人勿後於眾故；任人居後而自為之前，又為撒但大恥故。故既揄揚威力，頌美強者矣，[63]
（しかし人は恥とせず、地にひれ伏して神を頌え止むことがない。そのために主なる神はついに強くなったのである。もし衆人が神を離れとり合わなければ、どんな威力を持ち得ただろう。だが、人は神に力を与え、さらに、それを借りてサタンを制圧する。しかもこの人は、かつて主なる神が滅ぼしたものの同類なのである。サタンの眼から見れば、その頑迷愚劣さには言うべき言葉がなかろう。衆人にこれを諭そうとしても、声もかけぬうちに逃げ出してしまい、内容がどうなのかなど考えもせぬ。では逃げるにまかせるがいいかといえば、それはサタンの意とするところではない。だからサタンは権力をもってこの世に現れたのである。神は一つの権力である。サタンもまた一つの権力である。ただ、サタンの力は神より生じたものである、神の力が滅びてもこれにとって代わることはできない。上は力で天帝に反抗し、下は力で衆人を制圧する、これほど矛盾の甚だしい行動はない。だが衆人を制圧するのは天帝に反抗するためである。もし衆人がともに反抗するならば、制圧する必要などないのである。バイロンもまた同様であった。自分は必ず人の先頭に立ち、人が衆人に後れることを怒った。つまり、自分が人の先頭に立つのでなかったら、衆人に後れるな、と人には言えぬわけである。人が遅れをとっているのをそのままにして自分は先頭に立つということも、サタンの大いに恥ずるところであったからだ。故に威力をたたえ強者を讃美しながら[64]、）

（15）は、材源資料によるものではなく、魯迅の独自的な評論であると判明した。

上述した内容を分析してみると、以下の結論を得ることができよう。

①大衆は神を信仰し、畏敬しているからこそ、神に強力を与えたわけである。神の強力な権威や権力は人々によって与えたられたものであり、彼自身が持っているわけではないと魯迅は主張している。ここでは、魯迅は神の権威を批判し、否定したと考えられる。

②人々が神に強力な権威・権力を与えた以上、また人々は神の権力を利用し、もともと自分の同類（悪魔）を制圧することは、人々の愚かな行為であると魯迅は考えているのであろう。

③サタンの最大の特徴は、神に反抗することである。また、サタンは神に勝ったとしても、神の代わりに、権力を乱用することはないと魯迅は強調しているのであろう。

④サタンが大衆を制圧しようとするのは、神に反抗することと同義だからである。「もし衆人がともに反抗するならば、制圧する必要などないのである」と一句からみると、魯迅はサタンの口調を使って、抵抗を考えていない大衆を批判し、仮に大衆が力を合わせて神に反抗すれば、彼の権威を打破することができると主張しているのであろう。

⑤サタンは大衆の前に立ち、彼らを率い、神に反抗しようしているが、反抗を考えていない大衆の前では、サタンは恥をかいたと魯迅は考えているのであろう。

（16）複曰，吾愛亞美利加，此自由之區，神之綠野，不被壓制之地也。由是觀之，裴倫既喜拿坡侖之

63）魯迅《魯迅全集・第一巻・墳・魔羅詩力説》、人民文学出版社、2005年、80-81頁。

64）魯迅『魯迅全集・第一巻・墳・魔羅詩力説』、学習研究社、北岡正子　訳、1984年、116-117頁。

毀世界，亦愛華盛頓之爭自由，[65]

（また「われはアメリカを愛する。これは自由の地、神の緑野、圧制を被らぬ地である」とも言う。これによってみれば、バイロンはナポレオンが世界を蹂躙したことを喜びながら、またワシントンが自由のために戦ったことも愛し、[66]）

上述した（16）の材源は、確かに木村鷹太郎『バイロン　文芸界之大魔王』第三篇十四章、273-274頁によるものである[67]と確認した。

原文は、

「此後又希臘の獨立戰爭を助けて戰陣に在りし時、バイロン一米人に向て曰く『余はアメリカを愛す、これ自由の地、神の緑野、壓制を破らざるの地なり』と。バイロン又た自由のために戰ひたるワシントンを好み、亦世界を蹂躙したるナポレオンの大意志を愛す。」とある。

上述した内容を比較してみると、（16）は、すべて材源によるものであり、原文の評論を超えることがないとわかった。

（17）既心儀海賊之横行，亦孤援希臘之獨立，壓制反抗，兼以一人矣。雖然，自由在是，人道亦在是。[68]

（海賊の横行を心の範としながら、またただ一人ギリシャの独立を援け、圧制と反抗を一人で兼ねていたのである。しかし、自由はここにあり、人道もまたここにあるのだ。[69]）

（17）は、参考資料によるものではなく、魯迅が加えたものであると判明した。（17）は第四節の最後の二行[70]であり、第四節を総括する。「既心儀海賊之横行」は、第四節第十三行[71]に、バイロンが書いた『海賊』（The Corsair）と第三十二行[72]に、バイロンが書いた『ララ』（Lara）に呼応する。両作品における主人公は海賊であり、バイロンは彼らへの憧れを表している。（バイロン）「亦孤援希臘之獨立」は歴史上の事実であるので、魯迅は「人道亦在」を評価している。「自由在是」は（16）の「亦愛華盛頓之爭自由」に呼応する。「而壓制反抗，兼以一人矣」は、（15）の後、再び、魯迅のバイロンに対する独特の理解が示されている。それは、（15）の「上則以力抗天帝，下則以力制眾生，行之背馳，莫甚於此。顧

65）魯迅《魯迅全集・第一巻・墳・魔羅詩力説》、人民文学出版社、2005年、81頁。
66）魯迅『魯迅全集・第一巻・墳・魔羅詩力説』、学習研究社、北岡正子　訳、1984年、117頁。
67）北岡正子《魔羅詩力説材源考》、何乃英　訳、北京師範大学出版社、1983年、24頁。
68）魯迅《魯迅全集・第一巻・墳・魔羅詩力説》、人民文学出版社、2005年、81頁。
69）魯迅『魯迅全集・第一巻・墳・魔羅詩力説』、学習研究社、北岡正子　訳、1984年、117頁。
70）魯迅《魯迅全集・第一巻・墳・魔羅詩力説》、人民文学出版社、2005年、81頁。
71）魯迅《魯迅全集・第一巻・墳・魔羅詩力説》、人民文学出版社、2005年、77頁。
72）魯迅《魯迅全集・第一巻・墳・魔羅詩力説》、人民文学出版社、2005年、78頁。

其制眾生也，即以抗故。倘其眾生同抗，更何制之雲？裴倫亦然，自必居人前，而怒人之後於眾。蓋非自居人前，不能使人勿後於眾故；任人居後而自為之前，又為撒但大恥故。」に呼応する。魯迅の理解は以下の二点がある。

一、バイロンの特徴の一つは反抗（天帝のような強権）である。

二、バイロンのもう一つの特徴は衆人を制圧するということである。つまり、バイロンは、必ず大衆の前に立ち、大衆を率いなければならない。それだけではなく、大衆の上に立っているバイロンは、ただ自分独りで強権に反抗し、大衆が反応しないと（愚かな大衆なので、バイロンの反抗する意味を理解できない）、バイロンにとっては、大いに恥をかいたと考えられる。

おわりに

上述した魯迅の『カイン』に対する評論を分析してみると、以下の結論が出ることができよう。

①（1）、（11）からみると、魯迅は、『カイン』原文を読んだ可能性が非常に高いと私は考える。

②主に『カイン』を評論する部分は（1）、（4）、（7）、（10）、（11）である。主に『天と地』を評論するのは、（2）、（12）、（14）である（この部分は魯迅の独自的な評論がないということであると考えられる）。悪魔サタンを評論するところは、（3）、（8）、（15）である。人の神の権力への信仰を評論するところは（6）、（9）、（13）である。神を評論するところは、（5）である。魯迅は『カイン』を評価する同時に、『天と地』への評価を結びつけている。主な目的とは、サタン、神、人間との関係をより評論するためであろうと考えられる。バイロンを論述するのは、（16）、（17）である。

③魯迅は『カイン』を評価する部分を分析してみると、（1）、（6）、（8）、（15）、（17）以外は、すべて参考資料或いは原文によるものであり、独立的な評論を出していないとわかった。それにもかかわらず、それらの材源資料を選択する傾向からみると、魯迅は、神が権力を乱用すること（5）、人の盲目的な神の権力への信仰を批判した一方（6）、（13）、サタンの反抗を称賛したということ（7）が見て取れる。

④魯迅の『カイン』に対する評価から見ると、魯迅がバイロンを全体的に把握している範囲から脱していないと考えられる。一は主体意識ということである（15、17）。評論（15）、（17）から見ると、サタン（バイロン）は自分の周囲の愚かな大衆（神に反抗することを考えていない人々）との対立を認識し、それによって、彼らの上に立ち、自分が主導権を握り、主動的な地位に立っている。二は権威に反抗することである（15、17）。評論（15）では、サタン（バイロン）も「また一つの権力であ」り、彼の行動も「上は力で天帝に反抗し」ていると魯迅は強調している。